

京都府立大学山岳会山小屋の歴史

岩佐吉洋

1956年12月に西京大学(1959.5 京都府立大学に改称)山岳会会報創刊号が発行されております。この時をもって山岳部のOB会である山岳会が発足したようです。以来50年、山岳部、山岳会とも何度かの危機を乗り越え細々ながらよく続いてきました。我々の山小屋も一昨年開設20周年を迎えました。山岳会の存続には、この山小屋の存在も大きいのではないかと考えます。山岳会創設50周年を記念して、会報に沿って山小屋の歴史を振り返ってみたいと思います。会報 Vol.15.No.1(1985. 9)、武居三郎氏の「京都府立大学山岳会山小舎について」(以下引用文は原文どおり)や、1999年に高岸且氏がまとめられた「山小屋の歩みと今後の課題」に詳しいので、引用と補足のようになるとは思いますがお許しください。

1. 山小屋夢の時代(1960年から1981年)

会報 No.9(1960.9)に武居三郎氏の「山小舎を建てませんか」の文がはじめて見えます。会報 No.10(1960.12)、塚本瑠一氏の「私たちがつくろうとしている小屋は、合宿の基地にするためではない。もちろん合宿のベースになるにこしたことはないが、四季にかわる四辺の風景の中で、山の生活を、山の生命を語る場としての山小屋がほしいのだ」は今も変わっていないとおもいます。Vol. II.No.2(1961.1)、山小屋建設地を白馬山麓・細野の民宿「スキー館」丸山順営氏の紹介により、長野県北安曇郡白馬村細野地区北咲花(奥咲花)に決定。同No.3には「募金は予定通り集まりつつあり、工務店とも接触している」とし、デザイン案も載っています。Vol. II.No.8(1961.9)、土地 152 坪(502 m²)を現地確認、購入・登記終了(総額 118,030 円、第一の土地)。現在の和田野のペンション街のはずれ、道路が急速に傾斜を増して黒菱へ上がって行く辺りです。いよいよ実際に土地も取得し、山小屋建設機運は盛り上がりました。会報には、毎月のように山小屋に関する記事が載っています。(この頃は毎月会報が出ていました。)



しかし土地代は払ったものの山小屋建設資金が思うように集まりません。当時の大卒初任給が1万円前後の時代に、100万円目標の資金集めは大変だったろうと思います。会報も山小屋の話が遠のき、海外遠征や現役の合宿報告等でかろうじてつながり、不定期になっていきました。

5年を経過して Vol.VII.No.2(1966.12)、山小屋建設の話が再燃しました。11月23日ある会員の結婚披露宴に大勢の会員が久しぶりに集まりました。その時「やっぱり山小屋建てようよ」という話になったのです。山小屋建設小委員会設立。郵便局の積立預金で募金再開し、有志の月1,000円、2,000円の積み立てが始まりました。Vol.9.No.2(1968.8)には、「来秋竣工をめどに準備」という字がみえます。ところが次号 No.3(1968.11)によると、7月に丸山順営氏より連絡があり、「奥咲花の土地が無断で砂防工事用道路のため削られていた」ことが判明。白馬村との交渉の結果、代替地の検討を余儀なくされます。Vol.10.No.2(1969.7)、代替地は八方尾根、梅池と種々検討されましたが、先の土地の少し下の平坦な地(第二の土地、600 m²)に決定。現在は和田野のペンション街の中ですが、当時は林の中の静かな土地でした。その後、150万円の募金目標金額を元に、高田直樹氏を中心に東京の新進建築家黒川雅之氏と種いろいろ

な設計案を検討していきました。無いに等しい予算に斬新なアイデアを次々に出していただきました。この辺のいきさつは Vol.12.No.1 (1971.6)、高田氏の「府立大学山岳会山小屋計画＝現在に至るまで」に詳しい。そのなかの最後の案、ドーム型(直径 12m、100 m²)のビニシエル案が業者の協力もあり実現間近まで話が進みました。原価 350 万円を PR のため 150 万円で提供してくれるというのです。Vol.12.No.2 (1971.8)、「8 月末には着工の予定です」とあります。しかし、この話も破談になってしまいました。特許係争に引っかかってしまったようです。ほんの僅かのタイミングのずれでした。これが実現していればユニークな小屋が出現していたのですが、ショックのせいかこの後、山岳会の会報も 4 年間余の空白が出てしまいます。募金目標金額も最初の 60 万円から 100 万円、150 万円と計画を立て直すごとに上がっていきました。時代背景がうかがわれますが、まだ若い会員たちにはますます遠のく目標でした。

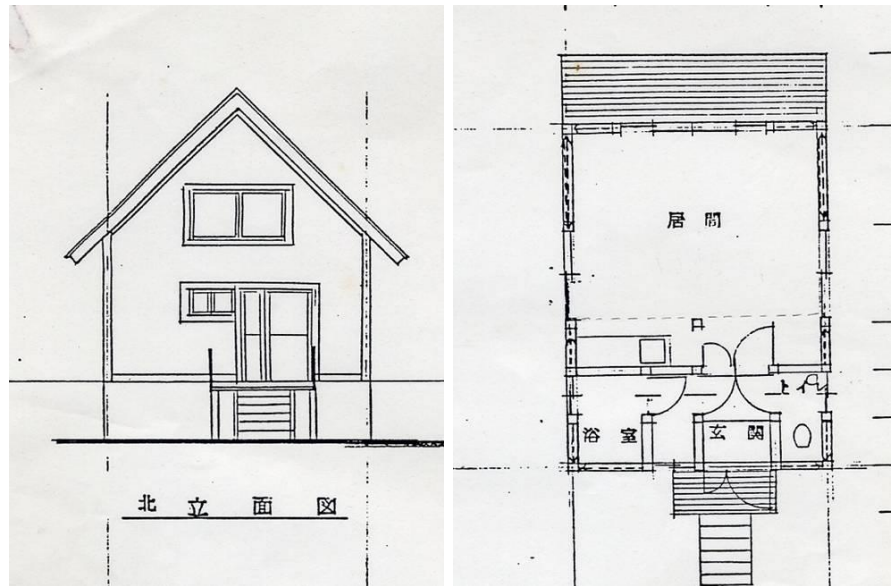


1974 年 1 月の松原保二氏の遭難に伴い、1975 年 8 月追悼集「悼 松原保二」が発刊されました。それを期に山岳会の再開を呼びかけた Vol.13.No.1 (1975.9)、が出ます。しかし、その後も会報は途切れがちでした。

2. 山小屋夢の実現の時代(1982 年から 1985 年)

その間にも時はどんどん流れ、時代はまさに高度成長期。奥咲花(和田野)の我々の土地の周りはいつの間にかペンションや別荘街に変わっていました。Vol.13.No.3 (1982.9)、周りを開発している白馬ライフ開発(株)から、「我々の土地が道路に面していないので道路負担として 300 万円負担してほしい」との申し入れがありました。とてもものめる話ではなく、何度か交渉の結果、楯池高原南奥の土地(第三の土地、登記上約 380 坪)に山小屋を建てて等価交換とする案に落ち着きました。これが楠川発電所の送水管上部に面した土地です。Vol.14.No.1(1983.4)、第二の土地はバブルのおかげで 724 万円の価値になっていました。ペンション街ではなく、より山らしい土地に一気に小屋も建つ、という話に山岳会はまた活気付きました。白馬ライフ開発(株)本社が東京ということもあり、東京在住の竹村義弘氏がメインになり交渉に当たりました。設計図も出来上がりました。こんどこそ、とみんなの夢も膨らみましたが、ここでも問題が発生します。秋には山小屋完成、引渡しというところまで話が進みましたが、土地の境界確認が取れず、おまけに実際の場所は先に確認した場所と少しずれるというのです。このままでは建築できません。またまた夢はしばみそうです。

Vol.15.No.1 (1985.9)、突然「永らくの夢であった我々の山小屋が、此の9月末に長野県の栂池スキー場のすぐそば、落くら原に出るようになりました」と書き出しています。今まで何度も裏切られ狼少年になりかけていた山小屋です。最後は上棟式を待っての発表となりました。偶然にも山田嘉和氏の上司の方の実家



で土地を譲っても良いという話が持ちこまれたのです。大勢の会員が現地を訪れ、我々の希望にぴったりであると、購入計画を進めることになりました。第三の土地から2kmほど下、落倉ペンション群の一番上です。これが現在の土地(400坪、第四の土地)です。ただし、この案では150万円の土地購入資金が不足することになりましたが、一会員のご好意によりこの不足金を拝借し、夢の実現にこぎつけました。念願の山小屋が実現した弾みか1989年には借入金も無事完済しております。たった12坪の、まさしく“小屋”というにふさわしい小さい山小屋です。外装檜、内装壁杉、床檜の小さくとも木の香りもすがすがしい感じのいい小屋です。水道は湧き水利用ですが、電気、ガスも引かれ、灯油のストーブも入りました。積雪を考慮し基礎を高く上げた高床式とし、屋根の勾配を強くしたのは、その後の山小屋の維持管理には大正解でした。

1985年11月3日とうとう「山小屋開き」のお祝いが山小屋で盛大に開かれました。「山小屋管理規則」、「山小屋運営細則」もできました。翌1986年には、当時の学長四出井綱英先生にも立派な表札を書いていただきました。(裏話になりますが、お礼はサントリーオールド“だるま”1本です。)

山小屋を建てようという話が出てから、実現まで25年。振り返ってみるとよくもいろいろなことがあったものです。最初から山小屋など要らないという人、土地を売って会員に返却して解散しようという人、いろんな意見もありました。しかし、大方の会員諸氏の思いは変わらず、情熱が途切れそうなきもありませんでしたが、ついに実現したのです。人生にたとえれば、波乱万丈とい



山小屋開き 1985.11

うところでしょうか。小説がひとつ書けそうです。なけなしの金を集め、10万円余で買った150坪の土地が、25年後150万円の追加で、800

坪の土地と 12 坪の山小屋に変わったのです。バブルの恩恵もあったようです。ここまで来るに当たって、25 年間通して情熱を切らさず、メインになって働いていただいた武居氏、残念な結果とはなりましたが、黒川建築士と斬新なアイデアを検討し、東奔西走していただいた高田氏、白馬ライフ開発(株)と折衝し、とうとう夢の実現にこぎつけた竹村氏、そして労を惜しまずサポートし続けた大勢の会員諸氏に敬意を表します。

3. 夢の現実の時代(1986 年から)

山小屋ができてからは、春のゴールデンウィーク、秋の連休には毎年恒例の「山小屋の集い」が催され、会員やその家族、現役部員等の楽しい交流の場となっています。毎回 10 人以上、時には 20 人を超える大賑わいになる事もあります。スキーシーズンや夏の登山シーズンには、会員の家族や友人などの都会を離れた格好の憩いの場ともなっています。2005 年 10 月 21～23 日には「山小屋開設 20 周年祭」も盛大に開催されました。いま会員諸氏の愛情により健全に管理運営されております。



夏の山小屋 2003.8



雪の山小屋 2006.3

4. 登記

京都府立大学山岳会は法人ではないため不動産を所有することができません。母校(京都府立大学)へ寄付しよう、という話もありましたが、京都府が長野県に不動産を所有することもできません。とりあえず個人名義(1 名)で登記しました。ただ、このままでは将来問題になる可能性があるのではと調べた結果、現状の山岳会は「法人格なき社団」(註)とみなされるため、1999 年代表会員(2 名)の個人名義で登記しなおしております。山小屋を維持するためには寄付金や管理だけではなく、この「法人格なき社団」の資格を継続しなければなりません。そのため、山小屋を利用するだけでなく、山岳会の組織そのものもしっかり確立した存在であり続ける必要があります

(註) 「法人格なき社団」が成立するためには、

- ① 団体として組織を備えること。
 - ② 多数決の原則が行われていること。
 - ③ 構成員の変更に関わらず団体が存続すること。
 - ④ その組織において代表の方法、総会の運営、財産の管理など団体としての主要な点が確定していること。
- が必要であるとされています。判例(最一判昭39.10.15 民集一八・八・一六七)

最後に現在登記されている内容を記しておきます。

1. (第三の土地)

長野県北安曇郡白馬村大字北城字落くら入14596番

原野 1,289㎡

2. (第四の土地)

長野県北安曇郡白馬村大字北城字落くら原14718番乙り

原野 1,322㎡

3. (山小屋)

長野県北安曇郡白馬村大字北城字落くら原14718番乙り

家屋 居宅 木造亜鉛メッキ鋼板葺二階建 41.40㎡

山小屋のメンテナンス

岩佐吉洋

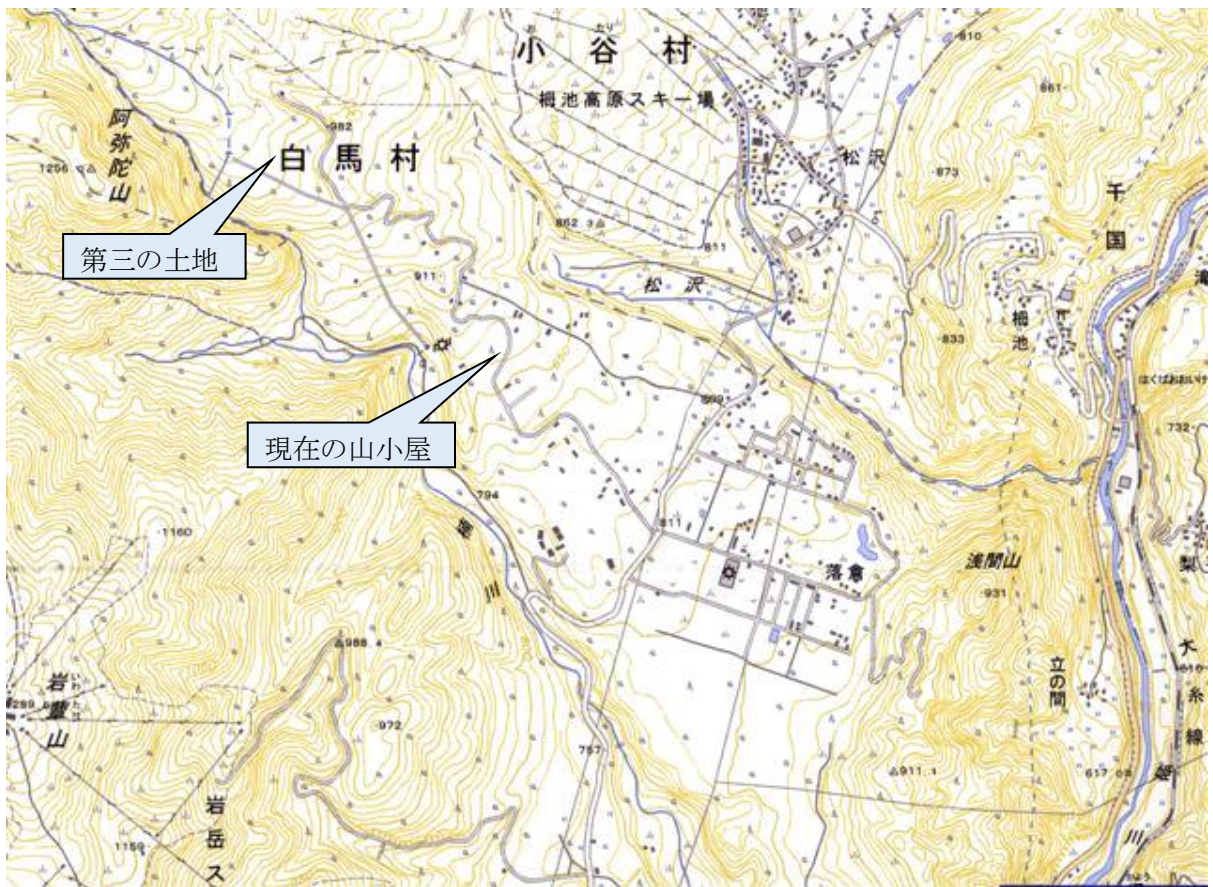
山小屋も念願の建設以来はや 22 年になります。通常の維持費(税金、光熱費等約100,000 円/年)は山小屋利用料によってほぼ賄っております。しかし長年健全な状態を維持し、より快適な小屋にするためには定期的なメンテナンスや改修に相当の費用がかかります。下に今までの主なメンテナンス・改修について書いてみました。これらは全て会員諸氏のご厚志による山小屋基金でまかなっております。また、下記以外にも、折々に貴重な物品の寄付や労力奉仕をいただいております。

- 1985 年 9 月 山小屋完成
- 1985 年 11 月 山小屋開き
- 1986 年 5 月 当時の学長四出井綱英先生に山小屋の表札を書いていただく
- 1987 年 11 月 第一回外壁塗装(会員の労力奉仕)
- 1995 年 11 月 10 周年記念集会
- 1996 年 11 月 網戸取付けと地下室の防水コンクリート工事(189,000 円)
- 1997 年 11 月 第二回外壁塗装(会員の労力奉仕)
- 1999 年 11 月 トイレの簡易水洗化(190,000 円)
- 2001 年 10 月 入口階段および裏側ベランダ腐朽に伴うコンクリート製への改修工事(446,000 円)
- 2004 年 4 月 屋根塗装(180,000 円)
- 2005 年 10 月 20 周年記念集会
 - 記念事業としての改修工事(850,000 円)
 - ・ 玄関階段手摺り取付け工事
 - ・ 小屋外周排水暗渠工事
 - ・ 室内階段踏み板改造工事
 - ・ 室内自動換気扇取付け工事
 - ・ 風呂場のシャワールーム化と暖房乾燥室化工事
 - ・ 台所吊り戸棚、居室収納棚取付け工事

現在に至る。そして今後の課題として

- ・ 三回目の外壁塗装
- ・ 暖房器具(環境にやさしく、省資源な器具への切り替え)の問題
- ・ 二階寝室の畳敷き
- ・ 設備の充実その他

山小屋のメンテナンスは、これからも山小屋を山岳会で維持する限り続く問題です。そのつど、それなりの費用が必要となります。引き続き会員諸氏のご協力をお願いします。



山小屋周辺地図